



関係人口
と協働する
【文化継承】

2023

持続可能な集落創造プロジェクト

～歴史的資料を活かした集落づくり(古地図調査班)～

[丸山地域]

実施者

《教員》千葉工業大学 創造工学部 建築学科 藤木研究室 藤木 竜也 教授

千葉工業大学 創造工学部 都市環境工学科 鎌田研究室 鎌田 元弘 教授, 磯野研究室 磯野 綾 助教

《参加者》千葉工業大学大学院 創造工学研究科 都市環境工学専攻 鎌田・磯野研究室 大島

《協働パートナー》

【行政】南房総市 市民生活部 市民課 市民協働グループ 【市民団体等】南房総市大井区ほか

1. 背景・目的

南房総市大井集落に関する古地図・古文書は、かつての大井集落及び嶺岡牧の様相を垣間見ることができる貴重な資料であり、集落の歴史的価値を裏付ける貴重な資料である。本プロジェクトは集落の価値を改めて評価することにより、伝統文化や歴史的資料を活かした集落づくりに寄与すること目的として、取り組むものである。

昨年度は、以下の2点から、古地図を現代の地図と重ね合わせる歪み補正は集落・嶺岡牧の特徴を推察できる有用な手段の一つになりうるとの仮説を得た。

- ①古地図に描かれた古道の一部が現在も使われていることは、大井集落における地域の歴史的価値を表すものの一つといえる。
- ②歪み補正において、歪みが小さい地域は集落南西部の大徳院周辺の歪みが、歪みが大きい地域は主に山中の他、大井集落東側一部が該当した。これらは、地図の描写精度の違いの背景に当時の地域の空間認識がある可能性を示すものである。

これらが明らかとなった一方で、昨年度抽出した共通描写点以外にも古地図に記載があるものの位置の同定が出来ていない地点等があった。このことから今年度はそれらの調査を進め、古地図に記載されている各地点からの可視領域を抽出することで、その特徴を把握する。また、その結果と過去2年度分の結果を組み合わせて、以下の3点について明らかにする。

- ①古地図作成当時の視対象や古地図を作成したと推測できる視対象の特徴
- ②古地図作成当時において、重要視していた地点/地域の有無とあった場合の特徴
- ③古地図作成当時の認識区分の特徴

2. 活動内容

- (1) 推測できた視対象^{※1}や視対象^{※2}の再確認と古地図記載点から視認できる対象の特徴把握

※1 視対象: 何かを眺めるときに人が立つ空間やその周囲の空間のこと。 ※2 視対象: 視対象から眺めることができる対象物のこと。

昨年度までの古地図掲載情報データベースを参考にし、古地図に記載されている施設又は地物の再確認を行った。今年度は、牧内の一定の区域を区切って何らかの土地利用を行った「坪圃」の位置と古地図に記載されている地名の位置を、地元住民からのヒアリング調査から特定することができた。

その上で、緯度経度が判明している点の67地点(図1)は古地図に描く必要がある地域にとって何かしらの意味を持つ地点であると推定できることから、これらを視対象候補として、カシミール3Dを用いて可視領域図の抽出を行った。しかし、新たに見つかった坪圃と地名は広がりを持つ空間であり特定の地点を示すものではないため、可視領域図の抽出に用いることができない。よって、地域の場合は、地域内の最大標高点を地点として扱い、可視領域図の抽出を行った。

大井集落唯一の寺である「大徳院」を例にとると、大井集落の北側の愛宕山付近を確認することはできないが、集落南西部を確認することができている(図2)。このようにそれぞれの地点において、視認している対象の特徴を把握した。

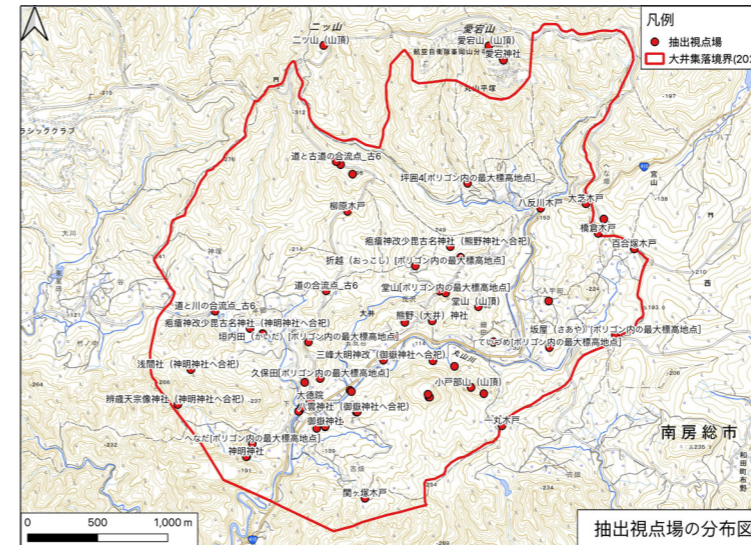
(2) 本集落において古地図作成当時の重要な出来事や集落や牧の運営に関する事項の確認

昨年度までの古地図掲載情報データベースから、古地図は江戸時代後期から明治・大正時代のものであることが明らかとなっているため、どの年代の歴史が記載されている「丸山町史」「嶺岡牧を歩く」「安房酪農百年史」等から調査を行った。また、その際に、当時の地域の区分けなどがわからない部分は、地元住民へのヒアリング調査から特定を行った。

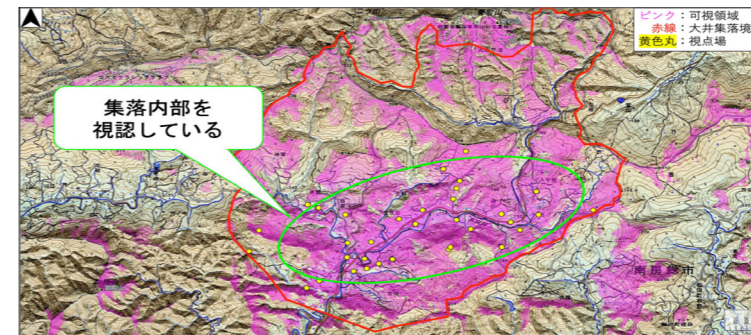
これらの調査から、大井集落の歴史は嶺岡牧の運営・管理との関係が深いこと、また土地利用の他年貢や経済活動を支える林・田畑、人・土地の管理をする役目を有する寺社・牧士が歴史(集落)を把握するために重要であることが明らかとなった。

(3) 古地図作成当時の認識区分の特徴

(1)で行った可視領域図を用いて、地点の分類ごとに可視領域図の



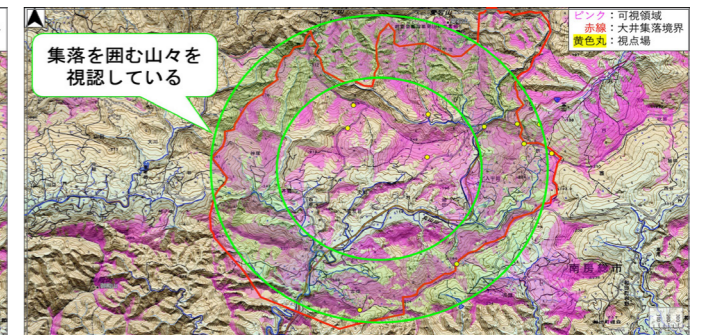
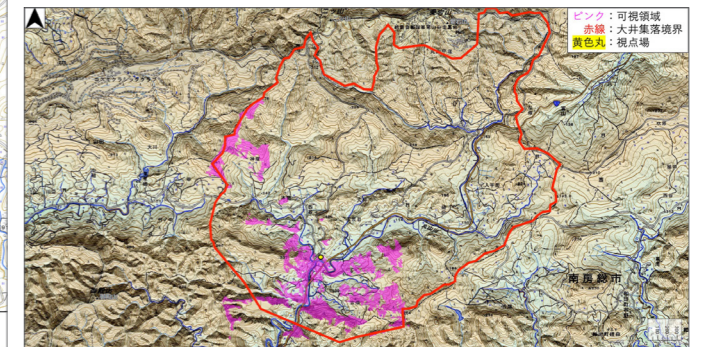
抽出視対象の分布図



寺社・地名の位置からの可視領域図

図1 緯度経度が判明している地点の分布図(左)

図2 大徳院からの可視領域図(下)



木戸・坪圃からの可視領域図

域学協働の工夫!

- ★古文書・古地図を保有する地域との協力関係を、地元住民の協力のもと広げた(a)
- ★クラウドストレージを活用し、地域及び関係者間での資料やデータの即時共有を可能とした(b)
- ★古地図・古文書を地元住民がスキャンし、それを元に千葉工大側で内容の解読等を行う等、役割分担を明確にした(c)

※b,cは昨年度からの継続的な取り組み

重ね合わせを行い、寺社・木戸・坪圃・地名の位置・山頂から視認できる対象の特徴把握を行った。

寺社・地名の位置においては、集落内部を視認対象としており(図3)、木戸・坪圃においては、集落外部を視認対象としている(図4)という結果が得られた。

3. 成果と課題

今年度の成果を含め3か年に渡り取り組んできた本プロジェクトでは、以下の3点が明らかとなった。

①古地図作成当時の視対象や古地図を作成したと推測できる視対象の特徴

古地図の視対象は、大井集落や安房国のみではなく、集落の産業の場であった嶺岡牧も含まれることが明らかとなった。

また、古地図作成のための視対象は、広域を見渡せるような一点のみと推察していたが、その一点だけでは古地図の描画内容を確認することができないため、複数の視対象から古地図を作成していたことを示している。

②古地図作成当時において、重要視していた地点/地域の有無とあった場合の特徴

歪み補正において、歪みの少ない部分は集落内の川沿いや合流点、

*表彰・マスコミ掲載など

・9月15日に日本建築学会大会(近畿)にて研究成果の一部を発表した。

大島 悠登, 鎌田 元弘, 磯野 綾: 古地図に描かれた景観特性の把握とその一考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集, No.6067, 157-158, 2023